

OKADA-ROOM Vol.14

岡田三郎助名品選 ―館蔵女性画を中心に―

会期 2019年6月21日（金曜日）～11月14日（木曜日）

佐賀県立美術館は開館以来、明治から昭和初期にかけて活躍した佐賀県出身の日本近代洋画の巨匠、岡田三郎助(おかだ・さぶろうすけ、1869～1939)の画業と人物を顕彰してきました。館内の常設展示室「OKADA-ROOM」では、岡田作品を中心に館収蔵の近代洋画の優品を紹介しています。

今年、令和元年は岡田三郎助の生誕 150 年にあたります。今回の OKADA-ROOM Vol.14 では、岡田の代名詞ともいえる優美な魅力を湛える女性像の名品を展示します。

女性という画題を通じ、西欧の技法に日本的な感性を接合させる試みを、岡田は生涯をかけて行いました。彼の香り立つような典雅な画風は日本近代美術史における美の完成形の一角を示しているといえるでしょう。

本展では、館蔵作品を中心に、さまざまな個性を持つ女性像を紹介します。また、妻・八千代を親密な雰囲気のかなかで描いた名品《ぬいとり》は、このたびご寄贈をいただき当館のコレクションに加わりました。本作品の舞台となった岡田三郎助アトリエ（県立博物館東側に隣接）と合わせて、岡田の豊かな芸術世界をお楽しみください。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
1	風景	Landscape	岡田三郎助	1919(大正 8)	40.8×26.6	油彩・カンヴァス	館蔵

東京渋谷伊達跡（現東京都渋谷区恵比寿）にあった岡田の居宅兼アトリエの脇の小道とバラの木のアーチを描いた作品。岡田は自邸の庭に多くの植物や花を植えていたが、バラをことのほか愛し、《少女読書》のように、女性像の手元や背景にバラの花をとりあわせる構図を好んで描いた。女性や花、裂地や工芸品など、美しいものを愛した岡田にとって、バラは自身の美意識を投影できる最適な題材のひとつだったのかもしれない。

2	<small>なかのたつ</small> 中野多津像	Portrait of Tatsu Nakano, Okada's Cousin	岡田三郎助	1893（明治 26）頃	85.0×54.8	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
---	-----------------------------------	---	--------------	---------------------	------------------	-----------------	----------------

長崎県・神奈川県の知事を務めた叔父、なかのたけあき 中野健明の娘を描いた作品。健明は洋画家を志していた若き岡田の良き相談相手であり、彼の家族もまた岡田と親しく付き合ったと考えられる。当時の岡田は画塾で修行中であり、色彩も暗くまだ筆運びに生硬さは見られるものの、澄ました中にあどけなさの残る少女の表情を、縁者ならではの親しみをもって誠実に描き取っている。

3	矢調べ	Testing arrows	岡田三郎助	1893（明治 26）	72.5×105.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	-----------------------	--------------	--------------------	-------------------	-----------------	-----------

明治 26（1893）年、堀江正章（ほりえまさあき）が主宰する画塾「大幸館」の卒業制作として描かれた作品。まだ旧来の暗い色遣いが画面を支配してはいるが、老人の腰あたりの陰影のつけ方に、のちに花開く優れた色彩感覚の片鱗を見ることができる。岡田は、初めて堀江のもとで本格的な色彩の表現を学び、これが後に黒田清輝らのもたらした新しい画風を理解するのに役立った、と後年回想している。（佐賀県重要文化財）

4	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1900（明治 33）	45.4×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵
---	--------------	----------------------------	--------------	--------------------	------------------	-----------------	-----------

本作は留学 3 年目に描かれたもので、同構図の作品が東京芸術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するというこも学んだのであった。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
5	清楚（少女）	Graceful Girl	岡田三郎助	1907（明治 40）	43.8×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵

カンヴァスの中からこちらをまっすぐに見つめる少女。髪と着物の輪郭はぼかされ、中心の少女の顔に視線が誘導されるように工夫されている。傾げた首やわずかに口角が上がった唇、瞳の中に描き入れられた光が、表情を生き活きと際立たせ、作品全体の甘い魅力を引き立たせている。当初は《習作（少女）》というタイトルがつけられ、1907（明治 40）年の第 11 回白馬会展に出品された。

6	<small>あざみ</small> 薊	Thistles	岡田三郎助	1908(明治 41)	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----------------------------	-----------------	--------------	--------------------	------------------	-----------------	-----------

第 12 回白馬会展への出品作。読書中に物思いにふける情景であろうか。女性の背後にはアザミの葉やキキョウが配され、秋の一こまであることがうかがえる。背景、着物、帯ともに緑色で統一されているが、それぞれ異なる色調に描き分けられており、岡田の色に対する非常に鋭敏な感覚を見て取ることができる。この時期、岡田は画面一杯を覆う植物の背景と着物をまとった女性の取り合わせを好んで画題とした。

7	婦人像	Portrait of a Woman	岡田三郎助	1909（明治 42）	60.5×48.7	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	----------------------------	--------------	--------------------	------------------	-----------------	-----------

岡田はこの時期、本作や《薊》など、物思いにふけるようなメランコリックな表情の女性像をたびたび描いた。女性の着物と背景はシンプルな濃褐色でまとめられ、暗がりから肌の白さを浮かび上がらせるような効果をもたらしている。女性の表情も丁寧に描きこまれ、当時の筆の充実ぶりをうかがうことができる。

8	ぬいとり	Embroidery	岡田三郎助	1914(大正 3)	72.7×42.4	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------------	-------------------	--------------	-------------------	------------------	-----------------	-----------

岡田は明治 39（1906）年、劇作家小山内薫の妹、八千代と結婚し、渋谷に新居を構えた。本作はそのアトリエの応接室内で刺繍にいそしむ妻を描いた作品。室内のインテリアや八千代の面差しの綿密な描写もさることながら、とりわけ手先の表情が丁寧に描かれており、プライベートで親密な雰囲気のかなかに岡田の充実した画力が伺える名作である。岡田は本作を終生手元から離さず、彼の没後はアトリエを引き継いだ辻家が所有し、2019 年に辻家から当館へ寄贈された。

9	朝鮮婦人	Korean Woman	岡田三郎助	1922（大正 11）	45.5×33.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------------	---------------------	--------------	--------------------	------------------	-----------------	-----------

岡田は大正 11（1922）年、第一回朝鮮美術展の審査員として日本統治下にあった朝鮮半島へ渡っている。恐らくはこの時、現地の女性をモデルに描いた作品であろう。固く結われた髷が初々しい印象を与え、ふっくらとした頬や唇の描写がなんとも愛らしい。背後の絵画の花は、現在の韓国の国花にも制定されているムクゲと考えられる。

10	少女読書	Reading Girl	岡田三郎助	1924（大正 13）	44.9×33.2	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-------------	---------------------	--------------	--------------------	------------------	-----------------	-----------

うらかな陽光を浴びて読書を楽しむ少女の肖像である。彼女の髪型や洋服は当時のモードである洋装のそれで、現代でいう雑誌のグラビアページのような、新しいタイプの美人画と言いうことができる。本作は、背景に描かれた窓の形から、岡田の自宅またはアトリエの外壁で描かれたものと考えられている。

11	花野	Field of Flowers	岡田三郎助	1917（大正 6）	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-----------	-------------------------	--------------	-------------------	------------------	-----------------	-----------

明治 30（1897）年から明治 34（1901）年の 4 年余りフランスに留学した岡田は、当時のサロンの重鎮であった画家ラファエル・コランのもとで制作に励んだ。外光のもとでの女性像は、コランが最も得意としていた主題の一つであり、岡田もこれに倣い、女性を描くようになる。本作は帰国後、コランが亡くなって翌年に描かれたもの。本作は師へ捧げるオマージュであったのかもしれない。（佐賀県重要文化財）

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
12	坐 婦	Sitting Woman	岡田三郎助	1929（昭和 4）	80.6×53.5	フレスコ・カンヴァス	館蔵

フレスコとは、乾いていない漆喰の上に顔料で着色する伝統的な技法。岡田は岩絵具やパステルなど、さまざまな画材を研究して制作に活かしたことが知られるが、フレスコ画の作例は非常に珍しい。本作は1919（大正 8）年に描かれた《化粧》という油彩画の再制作であることが分かっており、彼が異なる技法で同じ主題に挑戦していたことがわかる。岡田の実験精神が感じられる一作である。

13	裸 婦	Nude	岡田三郎助	1935(昭和 10)	99.8×65.5	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-----	------	-------	-------------	-----------	----------	----

1935（昭和 10）年の第二部会展に出品された作品で、岡田円熟期の傑作である。当時の新聞記事では「今までの帝展よりもつと力瘤を入れた作品」（報知新聞）などと評され、早くより名作の呼び声が高かったようだ。展覧会後は朝鮮の李王家が所蔵し、旧李王家美術館（現在の徳寿宮美術館、ソウル市）に飾られたが、1940（昭和 15）年の岡田の遺作展に出品されたのちは、一般に公開されることがなかった。（佐賀県重要文化財）

14	少 女	Portrait of a Girl	岡田三郎助	1932（昭和 7）	53.0×33.5	油彩・カンヴァス	個人蔵
----	-----	--------------------	-------	------------	-----------	----------	-----

上品な美人を描いて「美人画の岡田」と称された岡田らしい、優美な女性像である。金地を背景に着物をまとって立つ横向きの女性像という、岡田の昭和期の美人画として典型的な構図の作品である。女性が纏う着物は「紅縮緬地垣に葵熨斗模様小袖」（現所蔵：J フロントリテイリング史料館）とみられ、岡田がモデルに蒐集品の着物を纏わせた作例でもある。背景には金箔と金泥が併用されている。

15	^{そうそうえん} 涼々園にて	At Soso-en	岡田三郎助	1935（昭和 10）	40.9×53.0	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----	-------------------------	------------	-------	-------------	-----------	----------	---------

滞在していた旅館にて、《伊豆山風景》と同じ湾を望んで描いた作品。清涼な水辺の空気と和服の女性という組み合わせは、岡田の先輩格であり親しく交遊した黒田清輝の代表作《湖畔》（東京文化財研究所蔵）を思い起こさせる。モデルは当時、岡田のモデルを数多く務めた北村久子。一心に読書にふける姿は、柔和ながら凛とした雰囲気を漂わせる。

16	婦人半身像（下絵）	<i>Study of Portrait of Woman</i>	岡田三郎助	1936（昭和 11）	62.2×47.5	パステル・紙	館蔵
----	-----------	-----------------------------------	-------	-------------	-----------	--------	----

第 1 回新文展に出品された《婦人半身像》（東京国立近代美術館蔵）のパステルで描かれた習作。習作とはいえ、力強い輪郭線で縁取られた女性像は高い完成度を示している。岡田が構想に十分な時間をかけて本制作に移っていたことが分かる。モデルは《涼々園にて》と同じく北村久子と思われる。

17	エスキース	Esquisse	岡田三郎助	1909（明治 42）	74.2×30.3	油彩・カンヴァス	個人蔵（寄託）
----	-------	----------	-------	-------------	-----------	----------	---------

明治 41（1908）年より、岡田は日本最初の実業家社交クラブである「東京交詢社」の社屋内の壁画の制作を手掛けた。これはその準備作にあたる下絵であり、ギリシア神話に登場する文芸の女神「ムーサ」を描いたと考えられる。全身像の女神は日本風の髪型をしているが、その左上には西欧古代風のアクセサリーを付けた頭部もスケッチされており、岡田が髪型や細かな装飾までこだわりを持って制作していることが伺えて興味深い。

18	伊豆山風景	Landscape of Izusan	岡田三郎助	1935（昭和 10）	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵
----	-------	---------------------	-------	-------------	------------	----------	----

1935（昭和 10）年、岡田は伊豆・熱海を訪れ本作を描いた。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、穏やかに打ち寄せる海面との間にコントラストを生み出している。熱海には 1895（明治 28）年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として、当時多くの文化人や観光客を集めていた。

No.	作品名・資料名	英訳	作者名	制作年	寸法（本紙・cm）	材質	所蔵
19	裸婦胸像（習作）	Bust of Nude (study)	岡田三郎助	1936（昭和 11）	34.0×32.0	コンテ・紙	館蔵

コンテ（顔料を固めて作られた画材、パステルやクレヨンの仲間）で描かれたデッサンである。ほほや顎、肩から腕にかけての曲線が美しい。恥じらうようにうつむく女性の表情は甘くメランコリックで、まさに“美人画の岡田”と謳われた岡田の女性像の特質をよく表している。習作の域を越えた魅力を湛える珠玉の一作。

No.	作品名・資料名	英訳	材質等	所蔵
20	石膏像 エルチェの貴婦人	La dama de elche	岡田三郎助使用	石膏 館蔵

21	石膏像 マリエッタ・ストロッチ胸像	Marietta Stozzi	岡田三郎助使用	石膏 館蔵
----	-------------------	-----------------	---------	-------

岡田のアトリエには多くの工芸品や調度品とともに、複数の石膏像もあった。これらはそのうちの 2 体で、観賞用として、またデッサンのモデルとして活用されていたものであろう。「エルチェの貴婦人」はスペイン・バレンシア州において発掘された、紀元前 4 世紀頃の制作と考えられる像。「マリエッタ・ストロッチ」は 15 世紀のイタリアで活躍した彫刻家ローラナの作。それぞれの石膏による複製である。

22	岡田三郎助愛用のパレット	Saburosuke Okada’s palette	岡田三郎助使用	木製 館蔵
----	--------------	----------------------------	---------	-------

岡田が実際に制作に使用していたパレットである。裏面に「1897 Paris」とのサインがあり、留学の際にパリで入手したものであると考えられる。中央部分には、白色を混色して作られた淡い黄色やピンク、緑の絵具が残されており、岡田が描く女性の艶やかな肌に使われる色の数々を思わせる。

23	滞欧日記	Saburosuke Okada’s diary (in Europe)	岡田三郎助使用	館蔵
----	------	--------------------------------------	---------	----

岡田が留学中につけていた日記で、1898 年 1 月 1 日から 2 月 9 日までの記録がある。期間の短さに加え内容は端的で、購入物や食事場所、画塾に通ったこと等を示す簡易なメモのみが記されている。ただし、師コランからホルバインやレンブラントなどの模写を指示された旨が記されたページもあり、僅かではあるが、岡田の留学時代の動向を知ることができる貴重な資料である。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内 1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail:hakubi@pref.saga.lg.jp Web. http://saga-museum.jp/museum/